

第4回 バードウォッチング検定「身近な野鳥コース」

正解と解説

問題番号	正解	問題番号	正解	問題番号	正解	問題番号	正解
(1)	c	(31)	d	(61)	d	(91)	d
(2)	b	(32)	b	(62)	b	(92)	b
(3)	d	(33)	b	(63)	b	(93)	c
(4)	d	(34)	c	(64)	b	(94)	a
(5)	d	(35)	c	(65)	a		
(6)	a	(36)	c	(66)	a		
(7)	a	(37)	a	(67)	d		
(8)	d	(38)	b	(68)	d		
(9)	c	(39)	a	(69)	a		
(10)	d	(40)	d	(70)	a		
(11)	b	(41)	d	(71)	c		
(12)	c	(42)	a	(72)	c		
(13)	a	(43)	c	(73)	c		
(14)	a	(44)	b	(74)	d		
(15)	d	(45)	d	(75)	a		
(16)	b	(46)	c	(76)	a		
(17)	c	(47)	a	(77)	d		
(18)	c	(48)	a	(78)	c		
(19)	a	(49)	a	(79)	c		
(20)	d	(50)	a	(80)	d		
(21)	a	(51)	d	(81)	b		
(22)	b	(52)	d	(82)	b		
(23)	b	(53)	c	(83)	a		
(24)	c	(54)	a	(84)	b		
(25)	d	(55)	c	(85)	b		
(26)	b	(56)	d	(86)	d		
(27)	d	(57)	d	(87)	c		
(28)	a	(58)	a	(88)	d		
(29)	c	(59)	c	(89)	d		
(30)	d	(60)	a	(90)	a		

配点:(54)~(59)は各2点、それ以外は各1点

B

(財)日本野鳥の会

<評価の考え方>

この検定では、参考図書の紹介とともに「野鳥や自然に配慮しながら、バードウォッチングを楽しむ」
「身近にどんな鳥がいて、どのように暮らしているかを知る」ために役立つ知識を提供したいと考えて
います。

採点の結果、皆さまが何級となったかは、年内にご自宅に送付する予定です。A・B2つの分野で、
「A5点、B2点以上の得点で5級」のほかは、A・Bそれぞれが「15点以上で4級」、「25点以上で3級」、
「35点以上で2級」、「45点以上で1級」となります。2つの分野で得点が必要なので、もしAが50点満点で
も、Bが24点以下の場合は4級になります。

「級」は資格ではありません。(財)日本野鳥の会では、野鳥や自然への配慮とともにバードウォッチ
ングを広く普及したいという観点から、問題を構成し、級を設定しています。級はご自分の知識の範囲
や程度を知る目安と考えていただき、また、やりがいとしてご利用いただければ幸いです。

<問題の解説>

A 野外識別の基礎 (配点50点)

【A.1 身近な野鳥の識別 (配点40点)】

美しい姿やおもしろい行動など、野鳥に関心を持つと、その野鳥の名前を知りたくなるものです。と
ころが、図鑑で調べようとしても、すぐに名前がわかるとは限りません。『新・山野の鳥』では、「探鳥
会のようにベテランがその場で直接 教えてくれるイベントに参加すること」をお勧めしています。

初めて探鳥会に参加されると、次々に野鳥に気づいて見分けていくベテランと接して、「自分もそう
なりたい」と思う人がいる一方で、「自分にはとても無理」と感じてしまう人もいます。ベテランは
一瞬の姿や、かすかな声だけで名前を言い当てるので、「目がいい」「耳がいい」と思ってしまうかもし
れませんが、視力や聴力が人並み以上にすぐれている必要はありません。慣れや経験によって次第に気
づくようになるし、名前もわかるようになるものなのです。

「慣れる」には、めったに見られない珍しい鳥よりも、日頃よく出会う鳥が重要です。そこで、庭や
公園にもいる鳥や、どこに行っても見かけることが多い鳥を『新・山野の鳥』では「身近な鳥」、『新・
水辺の鳥』では「基本種」として最初に扱っており、この検定でも出題の中心にしています。

<問題1、2>

色や模様から野鳥を見分ける設問です。バードウォッチングの楽しみは名前がわかるだけではないの
で、「大人か、子どもか」「オスか、メスか」も設問になっています。

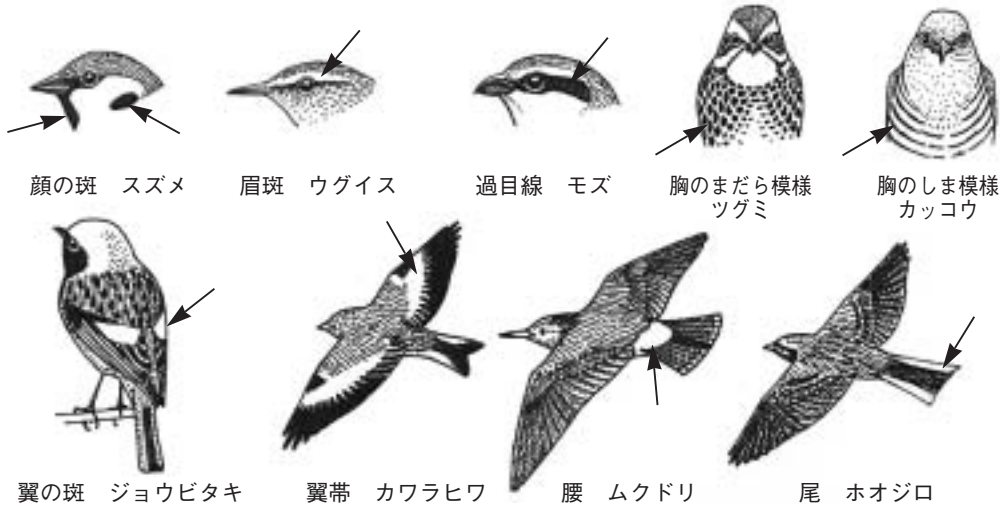
野鳥の子どもには、「幼鳥」という用語が使われます。巣立ちの頃に親鳥と体の大きさが同じになっ
ても、色が違うことで幼鳥が見分けられる例として(5)にムクドリを取り上げました。ムクドリはオ
ス(成鳥)よりメス(成鳥)の色が薄いのですが、幼鳥はさらに色が薄く、ほおの白い部分が小さくま
とまっている、くちばしや足のオレンジ色が目立たないものがあるなど、よく見ると違いがあります。
なお、小鳥の幼鳥では夏から秋にかけて成鳥に似た色になるものが多いのですが、ハクチョウ・ツル・
カモメなどのように成鳥と似た羽になるのは翌年以降という鳥もいます。

<問題3>

からだの一部分から見分ける設問です。野外では全身が見られるとは限りませんが、一部でもわかれ

けんとう ば見当をつけられるポイントがあり、^{ずかん} 図鑑によってはフィールドマークと呼んでいます（『新・山野の鳥』^{しんさんやとり} 『新・水辺の鳥』^{しんみずべとり} では、^{しきべつ} 識別の重要ポイントは種名の横に青字で示すようにしてあります）。

なお（8）では、^{あしゆび} 足指の付き方から、^つ キツツキのなかまということがわかれば^{せんたくし} 選択肢が絞られます。



目立つ色や模様为例

新・山野の鳥「野鳥の見分け方」より抜粋

色や模様のすべてがわかる必要はなく、印象的な部分に注目するとよいでしょう。

<問題4、5、6>

^{しゅ} 種の名前までわからなくても、「何のなかまか」がわかれば、^{しゅ} 種が限られるので名前も^{なまえ} 絞りやすくなります。また、種やなかまを見分けるには色や模様だけでなく「季節や環境」、「体型」、「行動や習性・^{しよくせい} 食性」「^{こえ} 声」などもポイントになることを設問にしました。つまり、^{ずかん} 図鑑の絵と見くらべるだけでなく、^{かいせつ} 解説を読むなどして知識を得たり、^{けいけん} 経験を積むことによって次第に識別できるようになるのです。

なお、（12）では、カルガモなどのカモのなかまは主に^{おも} 水辺で^{みずべ} 植物質（^{しよくぶつ} 水生植物の種や^{すいせいしよくぶつ} 草の芽など）^{たね} を食べるために「水草」を正解としていますが、^お 水生小動物も^{くさ} 食べることがあります。

<問題7>

^{みじか} 身近な鳥は、「慣れる」ことによって^{しきべつ} 識別の^{ひかく} 比較の^{きじゆん} 基準として使えます。野鳥の^{つか} 大きさは、^{やちよう} 距離や^{おお} 状況によって^{きより} 違って^{おお} 感じられるもので、^{おお} 例えば、^{おお} 近くで見たり、^{おお} 飛んでいるときには^{おお} 大きく感じます。スズメやハトでも、いつも^{おお} 大きさを^{おお} 気にしているようにしていると「ものさし鳥」として使えるようになるでしょう。



※全長は、くちばしの先から尾羽の先までの長さ
（鳥を寝かせた状態で計るが、固体差もあるので数字はおおよその目安）

身近な鳥の大きさ比べ
ひなこのお散歩鳥講座（野鳥639号、2001年2月号）より抜粋
イラスト／加藤明子

<問題8>

一声きけば名前がわかるような特徴的な声もあるし、ウグイスのなかまのようになかなか姿を見せない鳥、姿がよく似た種が多いために声が重要な識別ポイントになる鳥もいます。ただ、人によって聞こえ方やその表し方に違いがあるうえに、大きさを比べるようなものさしが特定されていません。身近な鳥のわかりやすい声から覚えるようにして、声の質や鳴き方などを比べながら、少しずつ知っている声を増やしていくのがよいでしょう。姿から識別する場合も同様ですが、難しいと思ったら無理してわかるよう、覚えようとしないう方がよいでしょう（ベテランでさえわからないものもあります）。

また、実際は声そのものの特徴より、設問にあるような季節や場所から考えて声の主を突き止められることが多いものです。

<問題9、10>

種、雌雄、成鳥・幼鳥を見分けるほかにも、「どんな場面なのか」を見分けて野鳥の行動や暮らしを知ることがバードウォッチングの楽しみと言えます。問題9では、総合的な設問としてフィールドノート（野外でメモや記録をとるためのノート）の事例を設問にしました。

【A.2 識別に役立つ用語、道具など（配点10点）】

<問題11>

バードウォッチングに使われる用語には定義が定まっているものもあり、図鑑によって違いもありますが、(41)のような季節についての知識は、識別で種を絞るときにも役立ちます。見られる季節は種や地域による違いもあるので「この地域、この季節、この環境にはこの鳥がいるはず」ということを知っている、気づくのも識別するのも容易になります。まずは自分の地域では、どんな鳥がいつ、どこで見られるかを知るようにしたらいかがでしょう。

(43)の冬羽は主に非繁殖期の秋冬に見られ、春夏の繁殖期に見られる夏羽より地味なことが普通です。つまり、繁殖期が終わると地味な羽になるものが多くと考えればよいのですが、カモのオスは例外です。冬に求愛するので、秋の深まりとともに派手な羽をまといます（カモの中ではカルガモが例外で、オスが派手になりません）。

<問題12>

用語の理解をかねて、羽の見分け方の設問になっています。風切羽は飛行に使われるという役割を考えれば、軸はしっかりしてはなりません。また、体を守るための羽より細長い羽が多く、もっとも細長いのが前進に使われる初列風切羽です。

<問題13>

見る目、聞く耳、あるいは感じる心や考える頭があれば、バードウォッチングに道具は不要かもしれませんが、道具を使えることで楽しみは増します。特に、双眼鏡や望遠鏡は野鳥を脅かさないで距離を保ったおつきあいをするうえでも重要と言えます。

(46)の双眼鏡の場合、「太陽を見ない」「レンズに触れない」「ぶついたりしない」は最重要の注意事項ですが、反対からのぞいても小さく見えるだけで問題はありせん。拾った羽などを接眼レンズに近づけると、虫眼鏡として使うこともできます。

<問題14>

『新・山野の鳥』では識別の方法やコツを8ページからまとめてあります。ベテランのようにすぐにはわからなくても、誰でも「慣れる、比べる、絞り込む」ことで次第にわかるようになります。最初はわからないのが当たり前、「わかること」より「わかり方を知る」ようにしましょう。また、慣れることで、比べたり絞ったりできるようになるので、いつでもどこでも野鳥を気にしているように、また、そのためにも何度も出会う鳥でもさまざまな観点から楽しめるようにしておくといでしょう。

(50)では、夏鳥・冬鳥・旅鳥などの渡り鳥が繁殖地を目指して北上する春と、彼らが越冬地まで南下する秋を、移動している鳥が多いことから正解としましたが、北海道など冬の気候が厳しい地域で冬も移動中の鳥が多いと、冬にも意外な出会いがあるかもしれません。初夏を中心にした繁殖期はなわばりをもつものが多く、移動する鳥は少ないと言えます。

B バードウォッチングの総合的な基礎知識 (配点50点)

【B.1 鳥や自然への接し方 (配点30点)】

<問題15>

「野鳥は法律上むやみにとることができない」「野鳥を守るための国際的な取り決めもあること」を知っていただくため、『新・水辺の鳥』54ページ「野鳥の保護に関する法律や条約」からの設問です。

(53)については、日本はアメリカ、ロシアと渡り鳥保護の条約、中国とロシアとは協定を結び、渡り鳥保護に必要な情報交換の会議や共同調査を実施しています。日韓には、日韓環境保護協力協定が結ばれており、その活動の一環として同様に渡り鳥保全のための会議が行われていますが、渡り鳥保護を目的とした条約・協定はまだありません。

<問題16>

野鳥を楽しむには、野鳥やそのすみかである自然を脅かさないようにしたいものです。日本野鳥の会ではフィールドマナーを提唱しており、『新・山野の鳥』では6ページ、『新・水辺の鳥』では7ページに標語としてまとめてあります。(54) (56)は野鳥だけでなく自然全体への配慮、(55)ではむやみに手を出さない方がよいこと(手を出すとしたら、法律や相手の習性についての知識が必要になります)、(57) (58) (59)では繁殖期は特に配慮がいること(一般に親鳥の警戒心が強い時期であり、1羽だけでなくファミリーに影響を与えてしまいます)を設問にしました。

<問題17>

『新・山野の鳥』55ページでは「野鳥を身近に呼ぶには、まずどんな鳥が周辺にいて、どんな暮らしをしているかを観察しましょう」と書かれています。ここでは、具体例を設問にしました。

(63)は、大きな穴の巣箱がよく見られますが、鳥はだいたい頭が入る程度の穴で入れるので、穴が大きいと嫌うだけでなく、カラスなどの被害にもあいやすいと思われます。

<問題18、19>

日本野鳥の会には「バードウォッチングを楽しみたい」と入会される方のほかにも、野鳥をテーマに自然や環境について取り組みたいという方もおられます。野鳥を見分けるだけが楽しみではないし、見分ける楽しみを続けたり広めたりするには、相手を守ることも必要になります。野鳥をどう守るかを

考えるには、彼らがどのように暮らしているかを知ることが重要で、暮らし方を知ることから生き物どうしの関わりや環境との関わりも見えてきます。(69) (70) (71) では生存率が低い自然界では「早い成長」や「子沢山」が原則であることを示しています。

(72) や問題19は日本野鳥の会も参加している自然体験活動推進協議会(通称CONE)による共通カリキュラム「2自然の理解」に準じた設問となっています。(参考:CONEHANDBOOK、自然体験活動指導者手帳、山と溪谷社)

【B.2 総合的知識や幅広い視点(配点20点)】

<問題20、21>

植物や虫と比べた場合、野鳥は行動的であることが魅力と言えるのではないのでしょうか。行動や習性についてはわかっていないこともたくさんありますが、名前を知るだけでなく、「何をしているか?」「なぜなのか?」などを気にしているとどんな鳥でも興味が尽きません。

なお、(79)のジョウビタキは北海道や雪の積もったところでは冬を越しません。(80)のキジバトは北海道では夏鳥で、春夏に繁殖しますが冬は越しません(下記の表参照)。

<問題22、23、24>

22、23の分類の知識は体系的な理解を助け、なかまを識別するのに役立ちます。24の分布は、識別で絞り込むポイントになります。

自分の地域ではおなじみの鳥が地域によっては珍しかったり、日本では珍しい鳥が他の国では普通にいたりもします。選択肢にあがった鳥ではコゲラ、オナガ、ヒヨドリ、アカハラは日本周辺の限られた分布で(オナガはヨーロッパの一部にも分布しています)、クマゲラはヨーロッパ、ヤマゲラはアジア、ミュビゲラやカササギではヨーロッパから北米まで広い分布域があります。

全国的に1年中見られる	コゲラ、ヒヨドリ、シジュウカラ、スズメ、ハシブトガラス、ドバト		
全国的に1年中見られるが、北部や南部で例外がある種			
コサギ	北海道で夏鳥(まれ)、南西諸島で冬鳥	モズ	北海道で夏鳥、南西諸島では鳥によって違いがある
カルガモ・キジバト・メジロ	北海道で夏鳥		
トビ	南西諸島でまれ	ホオジロ	北海道で夏鳥、南西諸島でまれ
カワラヒワ	南西諸島で旅鳥	ムクドリ	北海道で夏鳥、九州以南で冬鳥
ハクセキレイ・ウミネコ	北海道	ハシボソガラス	九州以北(屋久島や沖縄では記録がある)

身近な鳥の地域による違い
 ひなこのお散歩鳥講座(野鳥629号、2000年3月)より抜粋
 南北による季節の違いの例を表にしてみました

<問題25>

鳥のからだについては『新・山野の鳥』などに記載がない問題として、第3回バードウォッチング検定では、「よくひざと思われている、足のまがって見える部分はおかかどである」という設問がありました。

(90)の耳は、鳥には飛行に邪魔な耳たぶはなく穴があいているだけなので、羽に隠れて見えないのが普通です。死体や飼っている鳥、あるいは頭部に羽がない鳥(動物園のダチョウやハゲワシなど)で観察できます。

<問題26>

あると楽しい、あるいは普及に役立つ雑学の設問です。

(93) のスープに利用される鳥はアナツバメと呼ばれるアマツバメ目アマツバメ科の鳥で、スズメ目ツバメ科の鳥とはまったく別のグループです。なお、『新・山野の鳥』では63ページに目や科の一覧を載せており、ウミツバメはミズナギドリ目に属します。

(94) は日本野鳥の会では、鳥インフルエンザの正しい知識の普及に努めているので設問にしました(ホームページや冊子で扱っているほか、会報『野鳥』の11月号では鳥インフルエンザを特集しています)。

自然界にもともとある鳥インフルエンザウイルスは、病原性が低く野鳥と共存しているウイルスで、カモ類など水鳥には普通に見られます。最近、問題とされているのは高病原性鳥インフルエンザと呼ばれるもので、病原性の低い鳥インフルエンザウイルスが、ニワトリなどの高密度で飼育される家禽のあいだで感染が繰り返されるうちに病原性の高いものに変異したと考えられていて、野鳥が持つ鳥インフルエンザとは別の病気といえます。野鳥から高病原性鳥インフルエンザウイルスが確認された例は、感染した家禽からの二次感染のように極めて限られています。

鳥インフルエンザは通常では人に感染しないとされています。これは、ウイルスに適合性のある細胞表面の糖質が鳥特有のものだからです。国外では高病原性鳥インフルエンザが人に感染した例がありますが、これは病気にかかった家禽の糞の粉を吸い込むなどして、大量のウイルスを取り込んだためと考えられています。

したがって、自然の状態、つまり野生の鳥が野生のままに暮らしている状態であれば、野鳥が近くにいるからといっても怖がることはありません。

< (財)日本野鳥の会ご入会はこちらへ・・・ >

〒151-0061 東京都渋谷区初台1-47-1 小田急西新宿ビル1階

(財)日本野鳥の会 会員室

電話 03-5358-3510 (月～金 10時～17時)

ファックス 03-5358-3608

電子メール siryou@wbsj.org

ホームページ <http://www.wbsj.org>

<参考になるホームページ>

環境省 <http://www.env.go.jp>

財団法人 日本鳥類保護連盟 <http://www.ask.ne.jp/~jspb>

財団法人 山階鳥類研究所 <http://yamashina.or.jp>

財団法人 日本自然保護協会 <http://www.nacsj.or.jp>

財団法人 世界自然保護基金ジャパン <http://www.wwf.or.jp>

特定非営利活動法人 自然体験活動推進協議会 <http://www.cone.ne.jp>

<サンクチュアリに行ってみよう！>

一人ではなかなか野鳥を見つけられないときには、サンクチュアリに行ってみましょう。全国12ヶ所のサンクチュアリに(財)日本野鳥の会のスタッフ(レンジャー)がいます。

レンジャーは、来訪者に対する自然解説、バードウォッチング入門などのイベント、調査や保護活動を行っています。聞きたいことがあったら、気軽に声をかけてください。

また、日本野鳥の会の各地の支部でも活発に探鳥会などのイベントを行っています。日本野鳥の会のホームページ(<http://www.wbsj.org>)でイベント予定を確認し、参加してみるのも上達への近道です。

